風になひき波にゆられてはる〳〵と
ゆくへも知らぬわが身なるらむ

月の夜

鷺水

夏すぎ秋も　なかばなる
月も今宵の　さびしさに
なれし小杖を　友として
上野の奥を　とめ來れば
こゝよかしこの　草に木に
聲もかしまず　なく虫の
月にうらみを　もらすごと
彼方の人に　われも猶
思ひをいつか　忍ばずに
うつして見せん　すべもがな

碓氷の紅葉

東くめ子

人の巧と　神の業　いつれも深きみ山路の
梢の色の薄からぬ　うすひの嶺の紅葉見ん
げに山姫の織かけし　紅葉の錦うつくしと
思ふまもなく隧道の　あやめも分ぬ闇にいる
岩きり開き山を裂く　力は神かあなあやし
湯氣の力に登り行く　車も人のたくみとは
俄に夜は明け渡り　朝日にあらぬ夕づく日
木々の紅葉にうつろひて　見る目まはゆく照まさる

夢

敏子

ゆめと知りせはとこしへに
さめざらましを敷妙の
まくらの下は海なれと
君を見るめは生ひやらて
磯うつ波の音高く

あさちに虫の聲しげし

こころの花

つねを

八重にひとへに　さくら花
笑ふすがたや　春の夢
錦衣かざりて　山の端に
にほふ紅葉も　あきの彩
たけく優しく　うるはしき
大和ごころに　咲くはなは
あらしや霜の　折り〳〵に
あかき精神の　鍛錬はれて
君に捧ぐる　眞ごころの
まことの色香　あふれては
軈ては遠く　世界の
果てなき園に　かをるなり

説林

本邦古代保育法の一斑

下村三四吉

その第二は美稱であります。即ち美しいとか勇ましいとか立派なよい名をつけるのです。例へば木花開耶比賣とか倭建命とか申す類はこれであつて、歴史上には澤山例が見えて居ります。

次に第三のは、地名によれる名であります。その例を申しませう。垂仁天皇の時に見えてゐる狹穗彦と狹穗媛とは御兄弟でありますが、その狹穗